

【研究ノート】

下北地域における郷土芸能継承の現状と課題

Present situation and problems of local performing arts inheritance
in Shimokita area

工藤和彦, 清川繁人

青森大学社会学部

Abstract

While the Shimokita region continues to carry on a variety of local performing arts into the present day, it was found that the number of local performing arts being performed in 2023 (Reiwa 5) has decreased by approximately 60% compared to 1994 (Heisei 6). To explore the reasons for this, interviews were conducted with local governments and local performing arts organizations regarding their efforts and challenges, and a survey was conducted on the current and future state of performance. Furthermore, when comparing the population of the present day with that of the Edo period, when local performing arts were popular, it was found that the population is approximately three times larger today than it was during the Edo period, and it was estimated that population decline is not the direct cause of the decline of local performing arts, but rather that the concentration of people in urban areas and changes in lifestyle are the causes.

Keywords : Shimokita region, local performing arts, interviews, population decline, lifestyle

1. はじめに

本稿は青森大学教育研究プロジェクト「むつ下北地域における郷土芸能¹⁾継承の現状と課題～地域活性化の視点から～」(令和5～6年度・社会学部)により行った調査結果の報告と考察を目的とする。

「消滅可能性都市」という指摘が現実性を帯びるほど地方の人口減少は著しい。その影響が顕著に現れるものの一つが郷土芸能および祭りであろう。このことは「過疎地の伝統芸能の苦闘」(星野, 2011)をはじめ、既に多くの提起がなされている。

下北地域における身近な肌感覚での例を挙げる

と、筆者の属する地区²⁾では人手不足により年々祭りでの山車の運行が困難となっていた。そこへさらに新型コロナウイルス感染症拡大の影響で祭りそのものが休止となり、現在でも運行再開のめどがたっていない状況となっている。

そのような体験を持つ地域や人々は多いと思われるが、本研究の目的は、まず、下北地域の現状を何らかのデータで示すことである。

次に、郷土芸能当事者の方々にインタビューを行い現場での継承の現状をできるだけ把握することである。下北地域は青森県内でも特に郷土芸能の盛んな地域であり、芸能団体・芸能数も多い。し

かし、プロジェクトは時間的制約を抱えているため、限られた時間の中でサンプル的にインタビューを行い、その中から何らかの共通性や方向性を見出すことができればと考えた。

なお、ある大湊ネブタ制作者の言葉が本研究のヒントになっている。「人口減少を衰退の理由にはしたくない」。思わずハッさせられる言葉であった。郷土芸能をめぐる現状は厳しいが、確かに、安易に「人口減少」の一言で片づけるべきではないだろう。そもそも現在の人口減少は明治以降急激に増加した人口が減少している局面である。もちろん年齢構成は異なるが、郷土芸能が生み出された江戸期と比較しても、現在の人口はずっと多いはずである。本研究においては、そのような観点から下北地域における郷土芸能の状況を再考察してみたい。

2. 「郷土芸能の宝庫 下北」

「下北は郷土芸能の宝庫である」と、地域で開催された郷土芸能発表会での主催者挨拶で何度も聞いたことがある。ではそれを示す客観的データはあるのだろうか。またどのような動向があり現状はどのようにになっているのか、ここでは芸能数に着目して考えてみたい。

2-1. 青森県民俗芸能緊急調査報告から

下北地域における郷土芸能の豊富さを端的に示した調査結果がある。1994～1995年度に青森県教育委員会が調査しとりまとめた「青森県民俗芸能緊急調査報告書」(青森県教育委員会 1996)である。その中に悉皆調査として県内 67 市町村(当時)教育委員会に依頼してとりまとめたリストには郷土芸能がある程度、網羅的に列挙してある。

同報告書では青森県内で 455 件の芸能がリストアップされている。うち下北地域のものは 124 件で 27%を占めている。県に占める人口比が約 6% (1995 年国勢調査) であることからするといかに下北地域の芸能が豊富か分かる。さらにこの調査をもとに市町村別(当時)で比較してみた(表 1)。人口 1,000 人あたりの芸能数で比較してみると 1 位佐井村、2 位東通村、4 位脇野沢村(当時)、7 位川内町(当時)、10 位風間浦村とトップ 10 に 5 町村が入っている。下北地域内でも市・町に比べ村でより盛んな傾向がみられる。

表 1 県内市町村 人口あたり芸能数

順位	市町村名	人口	芸能数	1000人あたり
1	佐井村	3,173	22	6.93
2	東通村	8,045	44	5.47
3	新郷村	3,498	12	3.43
4	脇野沢村	3,019	9	2.98
5	横浜町	5,806	14	2.41
6	岩崎村	3,031	7	2.31
7	川内町	6,193	14	2.26
8	稻垣村	5,412	9	1.66
9	西目屋村	2,138	3	1.40
10	風間浦村	3,012	4	1.33
13	大間町	6,606	7	1.06
23	大畠町	9,874	7	0.71
39	むつ市	48,883	17	0.35

芸能数は青森県民俗芸能緊急調査報告書(青森県教育委員会 1996)、市町村名は 1996 年当時のもの、人口は 1995 年国勢調査(上記資料から筆者作成 緑は下北地域市町村)

下北地域は半島であり陸路では本州の最北端の行き止まりの地域である。と同時に北前船などの海運により中央の文化が直接移入される環境にもあった。そのような条件から豊富な郷土芸能が形成され保存・伝承されてきたのではないかと推測される。

2-2. その後の芸能実施状況

前述の調査から 30 年近く経過し、これらの芸能はどのような状況にあるのか。各市町村の教育委員会に照会した。この間、市町村合併により川内町、大畠町、脇野沢村はむつ市に合併している。また、これは 2023 年時点の調査であり、コロナ禍中であったことをご承知いただきたい。

市町村別に集計した結果を表 2 に示す。全体として現在の実施状況は割合にして 59.7%，約 6 割である。やはり数字の上でもこの間の減少傾向が明らかになった。市町村別にみると佐井村の 100% 実施は特筆すべきであるが、その他の市町村

表2 下北地域芸能実施数の推移

	1996年度 A	2023年度 B	割合 B/A
旧むつ市	17	6	35.3%
旧川内町	14	8	57.1%
旧大畠町	7	5	71.4%
旧脇野沢村	9	2	22.2%
大間町	7	5	71.4%
東通村	44	26	59.1%
風間浦村	4	0	0.0%
佐井村	22	22	100.0%
計	124	74	59.7%

(各市町村教育委員会への照会結果
から筆者作成)

ではおしなべて減少傾向がみられる。ただし筆者の見聞するところでは未実施と回答された芸能でもメンバーの状況により断続的に実施している場合もあるなど、一概に数値では表せない側面も多分にある点は留意しておきたい。

ちなみに人口の変化に着目してみると 1995 年の下北地域の人口は 88,805 人（国勢調査）で、2020 年が 67,280 人（同調査）、割合にして約 75% に減少している。そのようにみると、やはり郷土芸能と人口の減少割合は符合しているのかと考えさせられる。

3. 当事者へのインタビューから

下北地域の郷土芸能は数の上で豊富であるが種類も多彩である。概ね表3のようにまとめられる。今回は、調査に係る人的状況や期間を勘案し、いくつか団体をピックアップしてインタビューを行った。

表4 郷土芸能実施団体等インタビュー先

- 1 佐井村 矢越の神楽・歌舞伎等
 - (1) 夏祭りから
 - (2) 春祭り芸能発表会から
- 2 大間町 津軽海峡鳴り太鼓、
 - (1) 町教委担当兼芸能当事者
 - (2) 子ども会芸能発表会から
- 3 川内 川内の山車行事
 - (1) 八幡宮例大祭から
- 4 下北地区子ども会郷土芸能発表
 - (1) 主催者インタビュー

表3 下北地域の郷土芸能の一覧

芸能の種類	伝承地区等	文化財指定
能舞	東通村、むつ市、大畠の一部ほか	国指定重要無形民俗文化財
もちつき踊り	人気があり下北全域に	東通のもちつき踊りは県指定無形民俗文化財
神楽、獅子舞	下北全域 ルーツの違いにより特色あり	東通の神楽、獅子舞は県指定無形民俗文化財
祭りばやし	田名部、川内、脇野沢、佐井、奥戸、大間、風間浦、大畠など	各山車行事は県指定無形民俗文化財
歌舞伎	佐井村福浦 むつ市奥内ほか	福浦の歌舞伎は県指定無形民俗文化財
手踊り等	下北全域	—
その他	大間:津軽海峡海鳴り太鼓	—

(筆者作成)

インタビュー先の郷土芸能の種類、伝承地区などは表4のとおりである。位置を図1に示す。

なお、一部団体では時間等の制約により本来のインタビューとは形を変え、主催者や来賓あいさつから発言者の了承のうえ収録した。なお、ここで芸能の担い手ではない来賓あいさつを対象としたのは、芸能の保存・継承のためには当事者のみならず周囲の社会的な認識が重要との考え方からである。

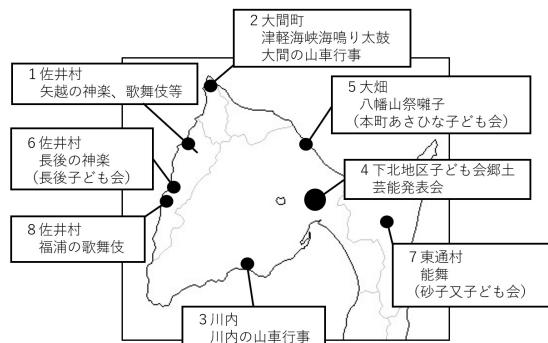


図1 インタビュー先郷土芸能 位置図

- | | |
|---|--|
| 1 佐井村 矢越の神楽・歌舞伎等
(1) 夏祭りから
(2) 春祭り芸能発表会から | 5 大畠 八幡山祭囃子(本町あさひな子ども会)
(1) 子ども会芸能発表会から |
| 2 大間町 津軽海峡海鳴り太鼓、大間の山車行事
(1) 町教委担当兼芸能当事者インタビュー
(2) 子ども会芸能発表会から | 6 佐井村 長後の神楽(長後子ども会)
(1) 子ども会芸能発表会から |
| 3 川内 川内の山車行事
(1) 八幡宮例大祭から | 7 東通村 能舞(砂子又子ども会)
(1) 子ども会芸能発表会から |
| 4 下北地区子ども会郷土芸能発表会
(1) 主催者インタビュー | 8 佐井村 福浦の歌舞伎
(1) 芸能保存会 |

3-1. 佐井村 矢越の神楽・歌舞伎等

(1) 夏祭りから

- 1) インタビュー年月日：2024年8月14日
- 2) 場所：佐井村矢越地区
- 3) インタビュー先：矢越の神楽 矢越若者会 A氏
- 4) 担当：清川
- 5) 概要

「矢越の神楽」は二人立の獅子舞で幣束(へいそく), 鈴, 剣を持って悪魔を払う祈祷の舞である。1901(明治34)年旧12月29日に東通村目名の若者頭に矢越の若者頭(現:矢越若者会)が御神楽の教授をお願いし, 師弟契約を取り結んで御神楽を習った(現在の矢越の御神楽は, その御神楽が伝承されたもの)。以降, 地区の特性に合わせて神楽を変化させてきた。囃子が目名地区よりやや早いとのこと。現在は目名地区との交流はない。2024年までは隔年で開催しているが, それ以降は毎年開催している。

6) インタビュー要旨

※質問事項を【】で, 先方の回答等を「▶」で表している。また, 後述する注目項目を下線, 附番で示している。

以下, 各団体について同様。

【郷土芸能の参加者人数】

▶年齢45歳までの若者会は10人未満だが, 高齢者が多い地区住民が協力しており(⑤社会の認識, ⑥助成・応援), 現状で参加者不足は生じていない。

【子供の割合】

▶子ども会のメンバー数人は山車のお囃子で参加している。

【参加人数の変遷】

▶ルール等を変えて, 必要な人数は足りている(②運営)。

【参加者減少対策】

▶子ども会に, 隣の集落からも参加するようエリアを拡大した(②運営)。

【郷土芸能の支援体制(町内会, 市町村, 県ほか)】

▶佐井村役場のバックアップがある(⑥助成・応援)。

【郷土芸能の運営資金の変遷】

▶佐井村役場の助成金で成り立っている(⑥助成・応援)。

【他の団体との交流状況】

▶特になし

【今と昔でのルール・しきたり等の変化】

▶当初若者会は35歳までだったが, 現在は45歳に引き上げている。子供も, 地区外からの参加を認めている(②運営)。

【練習の頻度】

▶子ども会の練習は, 夏休みの5日間で行っている。
【遠隔地からの参加者】

▶隣の集落の子供も参加している(②運営)。若者会の2名は帰省者。

【郷土芸能の継承での課題】

▶今なんとか足りているが, 数十年後は必ず後継者不足になる。

【今後期待する援助先】

▶引き続き村の助成を望む。

(2) 春祭り芸能発表会から

- 1) インタビュー月日：2025年3月9日
- 2) 場所：佐井村矢越地区生活改善センター
- 3) 聞き取り先：矢越地区会ほか
- 4) 担当：清川, 工藤
- 5) 概要

矢越地区は佐井本村地区の南に接した人口120人ほどの集落である, 每年春祭りに合わせて芸能発表会を行っている。この日も伝承芸能の神楽, 手踊り, 祭囃子, 歌舞伎のほか「婆々会」(婦人の会), 青年団, 漁師会等諸団体による新舞踊, 寸劇の要素を取り入れたショーなど, 笑いを交えにぎやかに行われた。



図2 矢越地区春祭り芸能発表会
(2025年3月9日, 筆者撮影)

6) 主催者, 来賓あいさつから

・矢越地区会 B氏

▶地区の若者会, 芸能保存会, 子ども会, 青年団, 婆々会, 水蓮クラブ等の各団体のみなさんが連日歌舞伎や踊りの練習を重ね今日の披露となる。年に一回の行事ではあるが地区の団体が一堂に集う

ことは地区内の融和が一層強まることにつながると思う (②運営).

▶郷土芸能はじめ地域の行事は貴重な財産である。今後とも皆様方のご協力を得ながら先輩たちが守り引き継いできた地区の伝統文化の継承に努めていきたい (①心意気).

・来賓 C 氏

▶郷土芸能の継承が高齢化や少子化、担い手不足で全国的に問題になっているが、矢越地区は小中学生が一生懸命がんばっているだけでなく女性が郷土芸能の継承に積極的に参加していることが特長だと思っている (①運営)。そういう部分を矢越地区だけでなく村内各地区にも見習っていただき広がっていけばと思っている。

・来賓 D 氏

▶自分の地元でも神楽の門打ちがあったが 10 年以上前からなくなってしまった。こういう伝統文化を残すのがいかに大変なものか日々感じている (⑤社会の認識)。そう思うとこうして地域の方全體で、そして若手の方が中心となって残している矢越地区はすばらしいことと思う。ご尽力に心から敬意を表する。

・来賓 E 氏

▶矢越地区におかれては、現在、どこの地域も全国的に、下北だけじゃなくて少子高齢化で担い手不足が言われている (⑤社会の認識) ところ、本当に地域をあげて地域の行事を盛り上げていることに圧倒され、感動させられている。昨年 11 月の佐井村郷土芸能発表大会でも神楽を見させていただき、また時代喜劇弥次喜多神主の場では大爆笑させていただいた。矢越地区の方は芸達者な方が多くて今日のプログラムの演目の多さにもびっくりしているくらいである。

・矢越地区公民館 F 氏

▶今回も様々なアイディアを出し合いながらプログラムを考えてきた。大型スクリーンを導入したが今日の発表会でも大活躍だった。

▶芸能発表会は矢越の伝統芸能を学び伝え、その成果を披露するという一面があり今年は神楽平獅子で前ぶりを G さん、太鼓を若者会会長、笛を H さんが吹いた。特に H さんはこれまで祭囃子も習ってきたが女性初の矢越神楽の笛吹きとなった。

▶子ども会の I さん、J さん、OB の K さん、手踊りのつきあげを習い披露してくれた。自分もつき

あげを習ったのが 30 年くらい前だった。今の彼女たちと同じくらいの時だ。30 年たった今また、新しい世代に受け継ぐことができうれしく思う (③育成)。

▶すでに来年に向けてこの踊りを習いたい、新しいことにチャレンジしたいという話が出ている。新しいことにチャレンジしながら伝統芸能を若い世代へ引き継いでいくことこそ、この矢越地区がいつも元気だと言われる所以だと思う (③育成)。

3-2. 大間町 津軽海峡海鳴り太鼓、山車行事

(1) 町教委担当兼芸能当事者インタビュー

1) インタビュー月日：2024 年 10 月 3 日

2) 大間町役場会議室

3) インタビュー先：大間町教育委員会 L 氏

4) 担当：清川、工藤

5) 概要

大間町教委の L 氏は社会教育担当として文化財の担当者であると同時に町の郷土芸能「津軽海峡海鳴り太鼓」の代表者であり、さらには大間稻荷神社大神楽、大間稻荷丸囃子の関係者でもあることから総合的にお話を伺った。

6) インタビュー要旨

【「津軽海峡海鳴り太鼓」のなりたち】

▶「津軽海峡海鳴り太鼓」は町制施行 40 周年を記念して 1982 年に創始された新しい郷土芸能である。当初、役場職員 12 名でのスタートだった。

当初の曲は、日本舞踊家の飛鳥亮氏の作で春・夏・秋・冬の 4 部作を予定したが未完のまま亡くなった。現在伝承されているのは「秋」のみ。「冬」は映像はある。「夏」は少しの記憶という状況。その後、秋田のプロ集団「蘭導」から 2 曲、浅草で活動していて大間に転勤してきた女性から 3 曲提供を受けている。

【現在のメンバー】

▶大人 7 名に子どもを入れて 20 名以上

【活動状況】

▶学校の学習発表会では、必ずやることになっている。

▶旧戸井町(函館市に合併)の文化祭に出演予定(⑦交流)。

▶大間ブルーマリンフェスティバル、田名部まつりのみこし祭り、下北沢音楽祭など(⑦交流)。

▶練習は毎週水曜日実施



図3 津軽海峡海鳴り太鼓
(2022年8月, 筆者撮影)

【課題】

▶大人が少ない。7名中5名は役場職員。一般が少ない。学校の先生の参加もあった。異動しても参加してくれている。

【財源】

▶行政等の助成はなし。(宝くじの助成が過去にあった) (⑥助成・応援)。

▶大漁旗から衣装をつくるなど工夫している。

【大間の祭り関連(神楽, 祭ばやし)について】

▶大間町の3地区にそれぞれ神社と祭りがある。大間地区: 稲荷神社…山車4台(うち船山車2台), 稲荷丸は大畠の山車(明神丸)との共通点もありそう。奥戸地区: 春日神社, 材木地区稻荷神社。

▶神楽については、奥戸と材木に共通点あり、大間は少し違う。神社の火災で現存資料がない。

【今と昔でのルールやしきたりの変化】

▶昔はもっと厳しいルールがあった。神楽を上から見るな, 洗濯物を干しておくな等。今はそうでもなくなった。「神社にこの人あり」というような人物が亡くなつてからか。

▶祭りの意義。神輿の渡御が主であつて、神楽が露払い, 山車がお供というような本来の意味が若い人に浸透していない。ただ騒いでいるのではない(②運営)。

▶山車によって笛吹きが途絶えてCDを流している(辨天丸の「通り」)。音源から復元を目指している。→むつ市の田名部祭り関係者に依頼。

▶子ども会も少なくなって、現在奥戸地区のみ。

▶最近、神楽をYouTubeに投稿するなどの動きも(④記録・PR)。

【課題】

▶他の祭りを見るのも大事。田名部祭りのようにきちんとしているところを参考にすべき。田名部まつりは組頭は40歳で定年。高齢者は相談役等になり引退し若い人に引き継いでいく(⑦交流)。祭りの役割を若い人にどんどんやらせることにより、責任感も生じ定着につながるのでは。自分もそうだったが、いつまでも下っ端では面白くないだろう(③育成)。

◎その他

▶失われている芸能もある。盆踊り, もちつき踊り, 大間小唄⇒郷土芸能発表会でのみ上演されていた。

▶来年2月に大間町の郷土芸能発表会がコロナ禍以来復活する予定。そこで大間小唄などやるかもしない。



図4 大間の山車行事 (2024年8月, 筆者撮影)

(2) 子ども会芸能発表会から

1) 日 時 令和7年2月9日(日)

2) 場 所 下北文化会館

3) インタビュー先: 大間町 稲荷丸祭ばやし保存会 M氏

4) 担当: 清川, 工藤

5) 概要

発表会で次のように紹介されている。「大間町稻荷丸祭囃子は、明治時代松前藩家老の後継人、能登谷市左衛門によって大間に伝承されたものです。祭の山車運行の際、三曲の囃子があります。通常運行の囃子を『とおり』、交差点を曲がる時の囃子を『かど』、山車の帰りコースにぎやかな囃子を『やまより』。この三曲を演奏いたします。」(第40回下北地区子ども会郷土芸能発表会プログラムより) これは、実際に祭りで演奏している子どもたちによるステージであり、出演後の団体にお話を伺った。なお、「大間の山車行事」は青森県指定無

形民俗文化財である。

6) インタビュー要旨

【人口減に対して】

▶人数少なくなった。どうしたものか。

【他からの応援】

▶そうだな、北通りで一体となってやるとかできないものか。

【女子も太鼓をやっていたが】

▶昔は男だけだが、人数がいないので最近は女子も入っている（③運営）。

3-3. 川内の山車行事

（1）八幡宮例大祭から

1) インタビュー月日：2024年9月14, 15日

2) むつ市川内町地区

3) インタビュー先：NPO法人シェルフォレスト川内 N氏、祭典関係者 0氏

4) 担当：清川

5) 概要

川内八幡宮例大祭は1711（正徳元）年に八幡宮のみこしに山車がお供して歩いたという記録から、少なくとも300年以上の歴史があり、また江戸時代の海運文化の象徴でもある。太神楽を先頭に、八幡宮のご神体を納めたみこしや稚児行列、そして上町の辨天山、中浦町の蛭子山、新町の大黒山、浜町の布袋山、仲崎町の舟山（田村磨像）の5台の山車が等身大の尊像を乗せ、豪快優美に、祇園調のおはやしに乗って町内を練り歩く。

青森県の無形民俗文化財に指定されている。全国各地に伝承する京都祇園祭系の祭りであり、高さ5mを超える木造固定構造の山車は、むつ・



図5 川内の山車行事（2023年9月、筆者撮影）

下北地区内だけではなく青森県内では最大級である。昼は古式ゆかしく、夜は一転してエネルギーに燃える祭に魅力があり、この手の山車としては県内随一の大きさを誇っている。

6) インタビュー要旨

【参加人数】

▶各山車に50~70人前後

【子供の割合】

▶山車のお囃子で15人前後、山車の行列にも参加
【参加者減少対策】

▶囃子方は小学生高学年・中学生の男子で30名程度が2組に分かれて行っていた。田名部とは異なり囃子方はアルバイト的に他の町内会への参加することも可能ではある（掛け持ちは不可能（②運営））。

【郷土芸能の支援体制（町内会、市町村、県他）】

▶山車運行中各戸を回りご祝儀を得ている（⑤社会の認識、⑥助成・応援）。

【郷土芸能の運営資金の変遷】

▶むつ市のバックアップあり（⑥助成・応援）。

【他の団体との交流状況】

▶各町の曳手（ひきて）や、のちに記述する周辺集落の「戻り神楽」は、この地のネブタ同様に自由参加が可能である。服装も自由である（②運営、⑦交流）。

【今と昔でのルール・しきたり等の変化】

▶少子化の影響で、男子小中学生の有志だけでは足りず、女子も参加可能になった（②運営）。

【遠隔地からの参加者】

▶お盆に帰省せず、例大祭に合わせて帰省する人が多い。昨年、海と森ふれあい体験館のインセンシップ参加者（弘前大）が友達を連れて今年も参加している（④記録・PR、⑦交流）。

【郷土芸能継承での課題】

▶地区住民が20年前の半数となっており、伝統行事を絶やさないこと。

【今後期待する援助先】

▶プログラムの詳細を紹介するサイトがなく、町内の人以外は何時にどこへ行つたらいいかわからない（④記録・PR）。

3-4. 下北地区子ども会郷土芸能発表会

（1）主催者インタビュー

1) インタビュー月日：2024年8月6日

2) 青森大学むつキャンパス

3) インタビュー先：下北地区子ども会育成連合
会 P 氏

4) 担当：工藤

5) 概要

下北地区子ども会郷土芸能発表会は下北文化会館の完成を機に 1986 年 2 月に第 1 回が行われ、以来コロナ禍を除き毎年開催され 37 回に及ぶ。近年は参加団体、参加者、観客とも減少している状況。本発表会については、工藤（2024）「下北の伝承芸能～子ども会の視点から～」を参照いただきたい。

6) インタビュー要旨

【参加人数】

▶かなり減った。以前は盛んで各団体からの演目も制限しなければならないほどだった。会場の下北文化会館の客席も地域ごとに割り当てエリアを決めて、そこに入れない人は 2 階席に行った。現在、学ぶ機会も減っているだろうし、師匠も高齢化している。

【参加者減少対策】

▶単位子ども会が縮小、廃止するなかで連合を組織してはどうかと働きかけている。しかし、なかなか土地に根付いたものを他でというのは難しいようだ。指導者によるところも大きい。保護者の関心も薄れ（⑤社会の認識）、そういう自然状態での支援体制というものがなくなってきたので、なかば強制的（強力）な支援が求められるのではないか（⑥助成・応援）。

【運営資金】

▶資金どうこう以前の問題と思われる。以前はネブタで練り歩いて資金集めをした。今は子どもも減少、そういうネブタのような地域行事もやらないので資金も集まらない。町内会や市等の補助は少額（⑤社会の認識、⑥助成・応援）。

【今と昔でのルールやしきたりの違い】

▶違ってきてる。祭の山車に乗る乗り子、昔は男子だけだったが今は女子も。また、前は中学生からだったものがいまは小学生から OK に（②運営）。背に腹は代えられないといったところ。

【練習頻度】

▶大畠の祭りの場合、9 月 1 日～13 日（14 日から本番）。8 月は仏さまの月として祭関連はやらない。一般的に舞台（披露する場）があれば練習すると

いうこと。生活の中ではそういう場はなくなってきているので、半強制というか意図的につくるしかないのでは（②運営、③育成）。

【課題】

▶大人がそういう地域環境をつくってあげる必要がある（③育成、⑤社会の認識）。しかし、師匠は高齢化。保護者の郷土芸能への関心が薄れている。理解示す人が少ない。子どもの舞台にも来ない保護者も。師匠（指導者）への尊敬もない（⑤社会の認識）。誰か一生懸命な人がいれば違うと思うが…。経費は（本質的なことではなく）二の次だろうとは思うのだが…。

【期待される援助】

▶以前は芸能発表会に出演するにしても各団体独自の経費でやっていた。それは団体が地域活動をして（ご祝儀などの）自己資金を持っていたから。いまは人数が少なくそういう地域活動ができない、よって資金もないという負の連鎖に陥っている（②運営）。したがって発表会にあたっての出演謝礼のようなものは考えても良いかもしれない（⑥助成・応援）。

3-5. 大畠 八幡山祭囃子（本町あさひな子ども会）

（1）子ども会芸能発表会から

1) 日 時 令和 7 年 2 月 9 日（日）

2) 場 所 下北文化会館

3) インタビュー先：大畠町本町あさひな子ども会 八幡山祭囃子 Q 氏

4) 担当：清川、工藤

5) 概要

発表会で次のように紹介されている。「むつ市大畠地区では毎年 9 月 14 日から 16 日に大畠八幡宮例大祭が斎行され、本町あさひな子ども会では、例大祭の一番山を務める「八幡山」に「乗子」として参加し、山車の重要な役割である囃子の演奏を担っています。（後略）」（第 40 回下北地区子ども会郷土芸能発表会プログラムより）出演後、団体の方にお話を伺った。なお、「大畠の山車行事」も青森県指定無形民俗文化財である。

6) インタビュー要旨

【全般的な状況】

▶あさひな子ども会はメンバーが小中学生。

▶ねぶたもある。ねぶたは 8 月中旬、祭は 9 月中旬



図 6 大畠八幡山祭囃子
(2025 年 2 月 9 日, 筆者撮影)

- ▶祭りの練習は 9 月 1 日から毎日
- ▶子どもはこういうのが好きだから, 場を与えてやらせる (②運営, ③育成).
- ▶祭囃子は, 昔は中学生だったが現在は小学生も入れている (②運営).
- ▶大畠祭りは山車が 7 台, 神楽が 5 つ, 大神楽も 2 つで計 14 団体もある.

3-6. 佐井村 長後の神楽

- (1) 子ども会芸能発表会から
- 1) 日 時 令和 7 年 2 月 9 日 (日)
- 2) 場 所 下北文化会館
- 3) インタビュー先: 佐井村長後子ども会 子ども神楽 育成者 R 氏
- 4) 担当: 清川, 工藤
- 5) 概要

発表会で次のように紹介されている。「長後稻荷神社は正徳 4 年 (1714 年) に勧請され, 藩政時代からの神楽は『昔神楽』といわれていましたが大正 6 年に途絶えました。現在の神楽は明治 39 年に東通目名の師匠から習得したもので, 現在も伝



図 7 長後の神楽 (2025 年 2 月 9 日, 筆者撮影)

承されています.」(第 40 回下北地区子ども会郷土芸能発表会プログラムより) 一般大人の神楽とは別に「子ども神楽」としてステージに臨んだ.

6) インタビュー要旨

【全般的な状況】

- ▶いま長後子ども会は 3 家族. 1 家族の子が卒業するので来年度で終了予定 (③育成).
- ▶だが, これからも盆と正月の一般の神楽には子どもも手伝う予定
- ▶今回, 秋から一生懸命練習した.
- ▶笛も師匠について練習した. 権現様は大人も使用するものを用いている.
- ▶(権現様は現在でも) 女子は触ることを禁じられているという. (ケースに入っていた.)

3-7. 東通の能舞 (砂子又)

- (1) 子ども会芸能発表会から
- 1) 日 時 令和 7 年 2 月 9 日 (日)
- 2) 場 所 下北文化会館
- 3) インタビュー先: 東通村砂子又子ども会 育成者 S 氏

- 4) 担当: 清川, 工藤
- 5) 概要

東通村を中心に伝承されている「下北の能舞」は, 中世風の語り物舞の諸番を持ち伝えており,かつて下北半島に殷賑を極めた山伏系の神楽として, その由来や伝承形態, 芸態等に芸能史上極めて注目すべき点が多いことから国重要無形文化財に指定されている. (文化遺産オンラインより)

東通村では, 14 の集落で能舞を伝承しているが, 子ども会による郷土芸能継承も盛んである. 村独自の子ども会郷土芸能発表会は最も古くから実施しており現在 46 回を数える.



図 8 東通 砂子又の能舞
(2025 年 2 月 9 日, 筆者撮影)

6) インタビュー要旨

【全般的な状況】

- ▶少子化の影響はかなりある。
- ▶子どもに教えることはできている（③育成）。
- ▶発表の場を持つことが大切だ（③育成）。
- ▶地区での発表会、村の郷土芸能発表会、今回の下北の発表会（持ち回り）、他の地区との交流という点では、村の発表会、村郷土芸能保存会の総会がある。
- ▶芸能としては各集落拍子も違う。しかし、途絶えた演目については他から師匠を迎えて復興することもある。
- ▶伝承していく原動力としては、昔から受け継いできたものを途絶えさせてはいけないという強い気持ちがある（①心意気）。
- ▶今日、舞うのは小学校5年と6年 子ども会現在男子が2人、女子6人。

3-8. 佐井村 福浦の歌舞伎

（1）地区芸能保存会

- 1) 日 時 令和7年2月7日（金）
- 2) 場 所 佐井村漁業協同組合内
- 3) インタビュー先：福浦歌舞伎保存会 T氏
- 4) 担当：工藤
- 5) 概要

「福浦の歌舞伎」は明治23年上方の役者中村菊五郎・菊松夫妻が伝授した。以来、戦争や生活様式の変化など困難な時期を乗り越え伝承してきた。昭和59年7月28日青森県無形民俗文化財に指定されている。近年は過疎化、少子高齢化の影響で役者や演奏者が確保困難となり 2016年からは地



図9 福浦の歌舞伎（2025年4月10日、筆者撮影）

区外からも役者を公募し活動している。

上演は毎年の春祭り（4月10日）、また津軽海峡交流に関わる芸能祭がある（⑦交流）。

福浦の歌舞伎については、うそりの風の会（2025）「うそりの風」第10号所収「『福浦の歌舞伎』参陣記」を参照いただきたい。

6) ヒアリング要旨

【次回の春祭り上演】

- ▶実施する方向で動いている。

【今後の展望】

▶地域外の方々の協力を得ながらでき得る限り続けて行くつもりだ（⑥助成・応援）。しかし、メンバーもだんだん年を取って来る。歌舞伎は身体的にもきつい面があるのでいつできなくなるか分からぬ。歌舞伎で無理をして本業の漁業などに差支えがあっても困る。また、福浦の住民だからといって必ずしも歌舞伎をやるとは限らない。（神楽はやっても歌舞伎はやらない人もいる）それは無理強いはできない。

4. 人口推移の状況

ここで、人口推移の状況をみておきたい。前述のように人口減少や少子高齢化が大きな社会問題となっている。しかし、郷土芸能の時間スケールで考えたとき少なくとも江戸期からの推移をみておく必要があるのではないかと考えた。

4-1. 下北地域の人口推移

我が国の総人口は江戸期初めには1,200万人程、明治初めでも3,300万人程でその後急激に増加。2000年代には1億2千万人を超えるピークを迎えたが現在急激な減少に転じたところである（国土交通白書2013）。

下北地域でも同様な傾向を示している。江戸期の人口が分かる資料は多くはないが「下北半島史」（ 笹澤 1978）³⁾に、享保5年（1720年）、安永9年（1780年）、明治13年（1880年）の地区別の人口が掲載されている。これを表5に最近の国勢調査とともに示す。また各地区位置を図10に示す。

1995年と2020年は国勢調査の小地域集計であり、概ね江戸期以来の地区名との対応は大きく外れていないと思われる。

まず下北地域全体での人口推移をグラフで表

表 5 下北各地区の人口推移

地区名	享保 5 年 1720	安永 9 年 1780	明治 13 年 1880	平成 7 年 1995	令和 2 年 2020
田名部	2,203	1,997	3,218	28,977	28,509
奥内	623	439	459	1,672	1,103
中野沢	205	209	182	441	312
白糠	250	333	733	2,332	1,647
小田野沢	189	150	235	1,074	714
田屋	291	296	392	471	282
砂子又	480	276	288	271	875
猿ヶ森	110	84	165	169	68
尻勞	166	253	236	559	320
尻屋	190	187	182	481	270
岩屋	63	93	241	413	242
野牛	164	155	227	906	589
蒲野沢	621	394	662	832	436
目名	205	163	300	325	297
大利	201	223	227	212	215
閑根	920	1,066	992	2,376	1,371
正津川	542	249	679	1,507	868
大畠	3,991	2,124	2,761	8,367	5,108
下風呂	326	315	476	1,072	573
易国間	685	371	541	1,249	678
蛇浦	397	211	342	691	385
大間	471	333	498	4,876	3,739
奥戸	1,103	528	950	1,730	979
佐井	3,430	1,215	1,489	2,680	1,550
長後	1,014	192	465	493	238
大平	272	320	375	7,584	7,531
安渡 (大湊)	590	815	1,362	6,665	4,165
城ヶ沢	502	224	634	1,168	583
川内	4,067	2,253	3,153	4,771	2,566
桧川	276	145	227	599	355
宿野部	338	328	471	452	228
駄崎	465	369	436	371	183
小沢	229	180	266	492	183
脇野沢	1,216	1,003	1,249	2,527	1,038
計	26,795	17,493	25,113	88,805	68,200

(1880 年以前は笹澤魯羊「下北半島史」, 1995 年以後は国勢調査をもとに筆者作成)

すと図 11 のようになる。

江戸時代, 1720 年から 1780 年で人口が 26,795 人から 17,493 人に激減 (35% 減) している。これは盛岡藩の留山政策⁴⁾により山仕事に従事していた住民が離散したためと言われている。当時としては大きなインパクトがあったであろう。

それに比し現在は急激に人口減少しつつも 2020 年国勢調査において 68,200 人を数えている。年齢構成は異なるが、ちなみにこの時の高齢化率は 35.2% であるため高齢者以外の人口に限っても

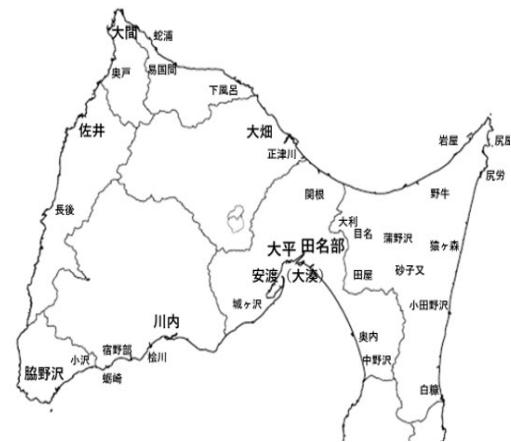


図 10 下北地域の各地区の位置図

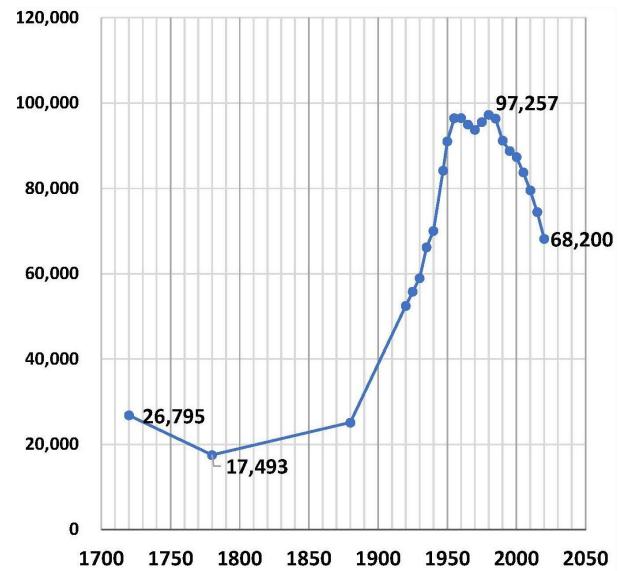


図 11 下北地域全体の人口推移
(1880 年以前は笹澤魯羊「下北半島史」,
1920 年以後は国勢調査より筆者作成)

約 44,000 人いることになる。

では地区別にみるとどうであろうか。1720 年と 2020 年を比較したのが図 12 のグラフである。圧倒的に人口集積が進んだのは田名部地区である。大平, 安渡 (大湊), また大間も人口集積が進んでいる。大畠, 川内はもともと人口集積が進んでいたが現在も傾向は同様である。佐井地区は江戸期かなりの集積地だったが現在では大きく減少していることが分かる。

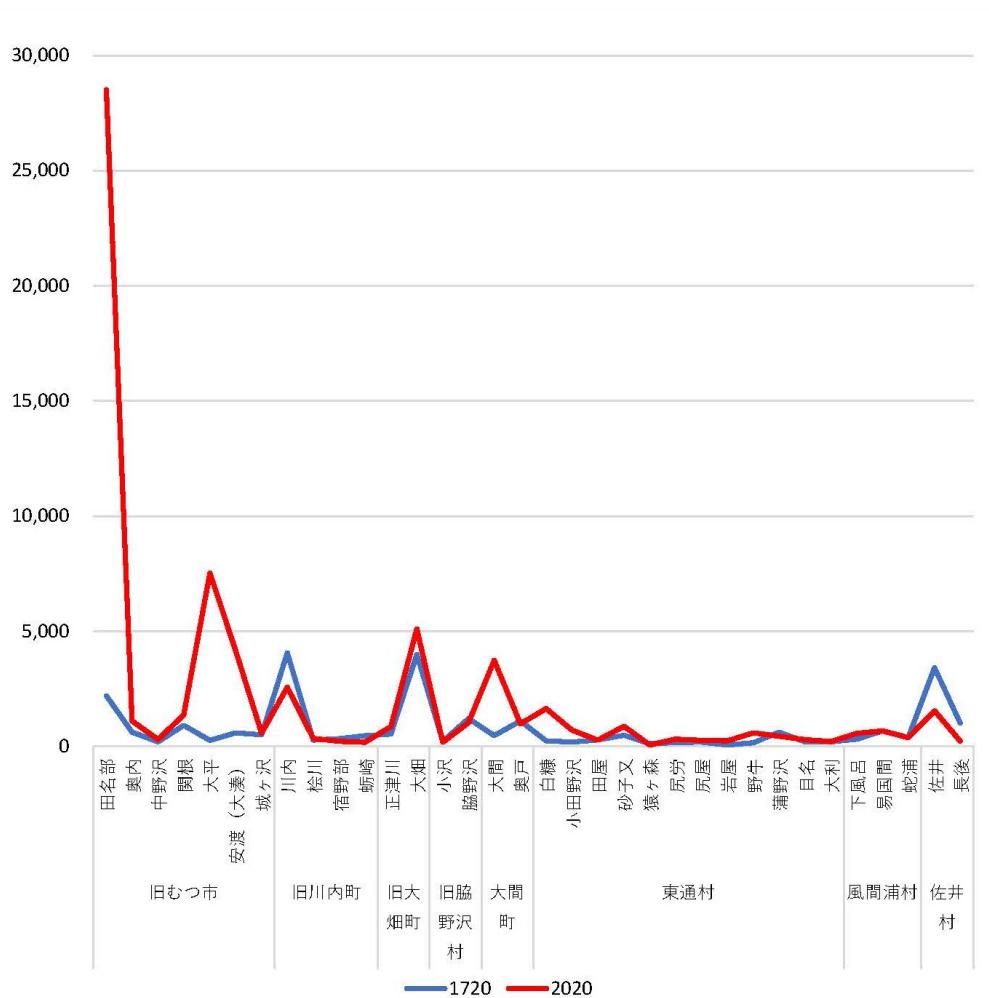


図 12 下北各地区別の人団比較

(1720 年/2020 年, 単位: 人, 1720 年は 笹澤魯羊「下北半島史」, 2020 年は 国勢調査より筆者作成)

5. 考察

5-1. インタビュー内容からの考察

インタビューでは各郷土芸能の当事者また関係者の方々からたいへん示唆に富むご教示をいただいた。それらを概観することにより郷土芸能を取りまく関係性を考えてみたい。

まず、聞き取り内容から注目する項目を取り出し分類しつつ、筆者の考えを加えて整理してみた。

項目は次の 8 項目とした。

①芸能の意義・価値・魅力、神事

②運営

③育成

④記録・PR

⑤社会の認識

⑥助成・応援

⑦交流

前述のヒアリング要旨中各項目にあたる部分を下線と附番をしている。①～⑦の項目を仮の関係図として作成したのが図 13 である。以下この図をガイド的に用いながら下北地域における郷土芸能継承の現状と課題をみていきたい。

①心意気

本調査を通じて最も重要な要素と感じられたのが「心意気」である。学術的な用語とは言い難いか

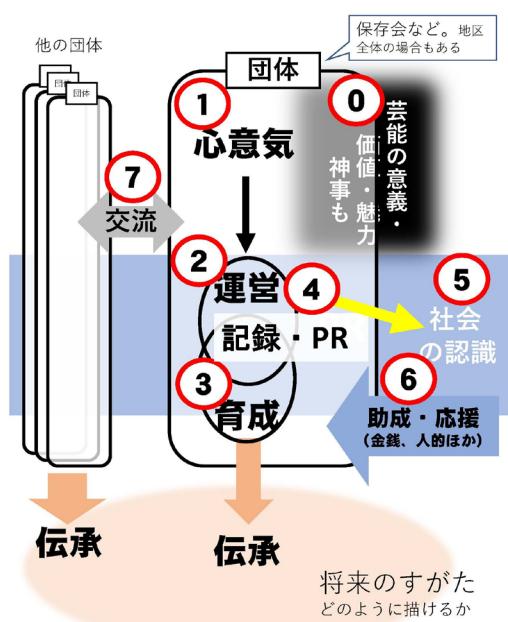


図13 郷土芸能をめぐる関係図
(試作版・筆者作成)

もしれないが、伝統芸能の継承には、「責任感」や「誇り」といった言葉では語り尽くせない、当事者感覚を伴う「心意気」が、最も重要であると考えられる。

そのような感覚の背景には、「芸能の意義・価値・魅力、神事」、つまり「受け継がれてきた伝統への敬意と愛着、芸としての魅力、また神事としての意義」といった要因があると考え、図13に「①芸能の意義・価値・魅力、神事」として仮置きした(このため、個別のヒアリング結果には反映していない)。

②運営

運営については幅広い面があるのでさらに分類した。

《参加ルールの緩和》

運営面においては地域、年齢、性別などのルールを緩和することにより担い手を確保していることが多い。

《発表の場》

また、発表の「場」が大切だというお話をしばしばいただいた。これは、③育成、④記録・PRにつながることもある。

《コミュニティ》

芸能発表の場がコミュニティの融合にもつながっている例がある。

《正統的な祭り運営》

祭の場合の神事として本来の意味を踏まえた運営、芸能の場合「真正性」ということが言われることがある。「真正性」といえば様々な考え方があり、例えば世界遺産は「真正性」を重視するが、無形文化遺産は「多様性」を重視し「真正性」を問わないと言われる一方で、古さや「真正性」を求めることが継承者のモチベーション維持につながっていることもあるという(久保田 2024)。これは①芸能の意義や③育成に関わることでもある。

③育成

佐井村矢越の芸能発表会では30年を超えて継承されていく現場に立会うことができた。

また、若い人に責任を持たせ役職につけることにより育てるということもあらゆる組織に通じうことである。

発表の場など、大人がそのような地域環境をつくるべきというのは⑤社会認識ともつながってくるだろう。

一方、少子化による子ども会の解散という現実もあった。

④記録・PR

YouTube のほかインスタグラム、Facebook などSNSの活用が珍しくなくなっている。これは、記録とPRの両面で活用できるものである。また、③育成においても活用できるものである。⑥助成・応援の観点からは、こういった分野でも必要とされるであろう。

青森県教育委員会文化財保護課では、伝統芸能に取り組む団体が自前で動画を作り、保存・継承に役立てられるよう、撮影用マニュアルを作成し配付するとしている。(デーリー東北記事、2024.3.7)

⑤社会の認識

一般的に郷土芸能への関心が薄れているのではないかとのことである。根本的には項目①の芸能の意義等も含めどのように④記録・PRを図っていくべきかという問題につながってくる。

⑥助成・応援

自治体、団体によっても対応は様々なようだ。

⑤社会の認識に関わることでもあり、もともと地域行事で自己資金を得ていたものがなくなり、行政の支援を求めるという構図もみられた。

人的な応援を得るということでは、福浦の歌舞伎は2016年から出演者を広く一般公募している。これは窮余の一策であろうが交流によりPR効果や社会の認識を高める効果が実際に得られていると思われる。

自治体の支援の例として、むつ市では条例を制定し伝統行事や民俗芸能の継承・発展に努めることとしている。（「むつ市伝統行事及び民俗芸能の継承発展に関する条例」令和6年4月1日施行）

⑦交流

下北地域内のみならず、津軽海峡を隔てた北海道または首都圏方面との交流もあるようである。

他団体との交流により運営方法などに良い点を取り入れたり、また助演するなど人的な相互の助け合いも行われている。また他地域との交流により④記録・PR効果や、⑤社会の認識へのアプローチとなるであろう。

なお、以上の分類に関連して、先行研究事例としては、「青森県における伝統芸能の維持継承に向けた対策のあり方」（青森中央学院大学森田ゼミ2017）がある。ここでは6つの枠組みでの対応策を提言している。1.情報発信・啓発活動の推進、2.子どもの体験の促進、3.外部人材の掘り起こし、4.外部人材の受入推進、5.企業との協力の強化、6.公的関与の必要性、である。また、このもととなった資料である「人口減少社会における中山間地の伝統行事（芸能）維持・継承策について」（長野県下伊那地方事務所 2014）を参考に挙げておきたい。

今回のインタビューでは「①芸能の意義・価値・魅力、神事」とした部分にはあまり触れられていなかった。これは部外者としては踏み込みにくい部分であるとともに、当事者の方々にとって最も大事なことであり軽々しく口にできないことがあるかもしれない。そもそも郷土芸能はその地区と住民のものである。代々その土地で受け伝えられてきたものであり、まして神事となるとなおさらであろう。しかし根幹となる部分だと思われる所以今後さらに注目すべき課題したい。

特に「魅力」については、演じる側と見る側、当

事者と外部の者では見方、感じ方が異なるであろう。しかし、色々な現場で演じる側も観る側も明らかに「魅力」を感じている様子が見て取れるし、同意する方も多いのではなかろうか。では、その魅力とは一体何なのだろう、それをどのように表現しどのように訴えていくか今後も注目していきたい。

5-2. 人口推移からの考察

一部地区への人口の集積というこのような人口分布の推移は、産業構造の変化とそれに伴う生活様式の変化ということに帰するであろう。都市型生活をする住民の割合が増えたということもできようか。

人口に着目すれば、下北地域全体では、江戸期と比較して激減しているとは言い難い。冒頭で紹介した大湊ネブタ制作者の「人口減少を衰退の理由にはしたくない」という言葉が説得力を持ってくる。

しかしながら、これも冒頭で述べたように、筆者の属する地区のように人手不足で山車運行ができないという現実が各地にあり、下北地域全体の人口と現場感覚には大きな乖離がある。

表5の各地区の人口推移を数値で個別に見ていくと、大幅に増加している地区もあるが、江戸期より減少している地区もある。それぞれの地区で郷土芸能が伝承されていることと思うがそれぞれの現状があり一概に述べることはできないだろう。

佐井村を構成する佐井と長後両地区は1720年との比較で人口が大きく減少している地区である。しかしながら佐井村は表1において人口当たりの芸能数が多く、また表2においてほぼ現在も実施されているということは注目すべきことである。

同じく表1においてむつ市（旧むつ市）は県内39位に位置しているが圧倒的に人口集積が進んだ結果、郷土芸能に携わる割合が少なくなったことがうかがわれる。

江戸期以来の「生活様式の変化」といえばこれは郷土芸能だけにとどまらない大きな研究テーマであろうが、今後も先行研究などを参考に深めていくことができればと思う。イメージしやすい例として「コミュニティデザインの時代」（山崎2012）に、「道普請」の例や、「『お客様化』する社会」として端的に述べられていたので紹介して

おきたい。

6. おわりに

下北地域はその地勢的な特徴、歴史的背景などから青森県内でも郷土芸能が豊富な地域である。しかしながら人口減少に伴いこの30年ほどの間に実施されている芸能が減少してきている。

そこで実際に郷土芸能携わっている方々にインタビューを行い実情についてお話をうかがった。その結果をもとに郷土芸能をめぐる種々の関係性について整理を試みた（図13）。

一方、人口動向の面から視点を変え郷土芸能が成立し行われていた江戸期からの時間スケールで人口推移をみた。現在は江戸期に比べ人口はかなり多いものの都市部への集積が進み生活様式の変化からか郷土芸能に関わる人の割合がごく少なくなっていることが推測された。

しかしながら、人口が必ずしも少なくはないという視点は数の面では悲観的なものではない。生活様式も意識も変わってきたであろう現代において新たな社会認識のあり方を模索し高めていくために項目①芸能の意義・価値・魅力といったところを再確認し、④記録・PRをしていくことなどができる余地がある。インタビューにもあったがSNSの活用などは可能性を感じられる。YouTube等を検索しても下北地域の郷土芸能の多くの動画を見ることができる。これにより筆者も多くの芸能を知ることができた。これらは大変貴重なものであるが、自由に投稿されたものでありこれらの有効活用法はまた大きな課題である。

個人的な意見になるが、①芸能の意義・価値・魅力を「言葉」ではどのように表現できるのだろうか。百聞は一見に如かずというものの、「言葉」で伝えることも重要ではないかと思う。意外にも下北の郷土芸能の魅力を言葉に表したもののが少ないように感じられる。今後さらにインタビューなどを進めていきそのような「言葉」をささやかでも拾い集めていくことができればと考えている。

謝辞

お忙しい中インタビューに応じていただいた郷土芸能関係者の方々に衷心より御礼申し上げます。様々な困難があるなか郷土芸能の継承に日々ご尽力していらっしゃることに敬意を表したいと存じ

ます。

また幅広い業務に日々ご多忙のところ、調査にご協力いただいた各教育委員会担当者の皆様に深く感謝申し上げます。本報告が少しでもご参考になれば幸いと存じます。

注釈

1) 地域に独自に伝えられてきた芸能を郷土芸能、民俗芸能、伝承芸能等と呼ぶ。文化財保護体系では民俗文化財に属するものとして「民俗芸能」と呼称されている。本稿では「郷土芸能」を用いるが、対象として下北地域に特化していること、また比較的新しい芸能である「津軽海峡海鳴り太鼓」も取り上げるなど地域における芸能を少し広い意味で捉え「郷土芸能」とした。また、ここでいう「芸能」には祭り等伝統行事も含んでいることをお断りしておきたい。

2) むつ市大湊地区では9月上旬に「大湊まつり」が行われている。明和5（1768）年の神輿の棟札があることから、その頃の発祥ではないかとされている。古来、「安渡」と呼ばれた湊町であることから、いつしか北前船を模した船型の山車が供奉するようになった。明治初年に伊勢参りで習い覚えたという「木遣り」音頭で曳かれる。大湊浜町の山車「稻荷丸」は嘉永4（1851）年には建造されておりいまだ現役である。祭り行事の衰退は以前より危惧されていたが、コロナ禍で決定的になり、以後、合同運行は行われていない。

ちなみに、「大湊まつり」は青森県民俗芸能緊急調査報告書（青森県教育委員会 1996）の悉皆調査には掲載されていない。そのような芸能・祭りもあるということを認識しておかなくてはならない。

3) 笹澤魯羊の「下北半嶋史」では江戸時代の下北地域の人口を表にしてまとめているが、その根拠史料は明確に示されていない。享保5（1720）年として挙げられた人口は、田名部御代官の役人によって書かれた「田名部御用留」（みちのく双書 笹澤魯羊文庫資料 1994 青森県文化財保護協会）の数値と一致している。安永9（1780）年では、大巻秀詮の「邦内郷村志」（南部叢書第5冊 1971 南部叢書刊行会）の数値に一致している。明治13（1880）年については不明であ

るが時期的には明治新政府の「壬申戸籍」に連なるものではなかろうか。

4) 下北のヒバは良質の木材として需要があり盛岡藩の有力な財源でもあった。しかし、明暦の大火からの復興を契機に江戸への移出が増えたことにより乱伐が進み山林が荒廃してきたため藩では一部伐採を禁じた。これを留山政策という。寛文4(1664)年には13か山が留山となつたが、享保5(1720)年には38か山に、さらに宝暦10(1760)年には208か山が留山とされ、取り締まりも強化された。これにより山林仕事で生計を立てていた住民は離散し北海道などへ移住を余儀なくされた。(参考資料:むつ市史近世編 1988 むつ市)

文献

- 青森県教育委員会(1996)「青森県民俗芸能緊急調査報告書」pp.166-174, 182-183
- うそりの風の会(2025)「うそりの風」第10号「『福浦の歌舞伎』参陣記」(清水克彦執筆) pp.2-17
- 工藤和彦(2024)「下北の伝承芸能～子ども会の視点から～」、青森大学付属総合研究所総研だより、第6巻第2号、pp.11-16
- 笹澤魯羊(1978)「下北半嶋史」、東京 名著出版 pp.66-70
- 下北地区子ども会育成連合会・下北文化会館(2025)
第40回下北地区子ども会郷土芸能発表会プログラム
- 青森県文化財保護協会(1994)「みちのく双書第37集 笹澤魯羊文庫資料田名部御用留」pp.14-23
- デーリー東北、2024年3月7日第3面記事「伝統芸能の保存・継承へ 撮影用マニュアル配付」
- 南部叢書刊行会(1971)「南部叢書第5冊 邦内郷村志」pp.379-409
- 星野 紘(2011)「過疎地の伝統芸能の苦闘」、無形文化遺産研究報告第5号、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、pp.29-39
- むつ市(1988)「むつ市史 近世編」第3章経済産

業第7節林業、pp.162-172

山崎 亮(2012)「コミュニティデザインの時代」、中央公論社、pp.4-pp.11

ネット情報

「青森県における伝統芸能の維持継承に向けた対策のあり方」(青森中央学院大学森田ゼミ)、公益財団法人青森学術文化振興財団ホームページ
<https://aogaku.sakura.ne.jp/ronbun.html>

(最終アクセス日 2025年9月1日)

国土交通白書 2013

<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h24/hakusho/h25/pdf/np101000.pdf> pp.2-3

(最終アクセス日 2025年8月20日)

市政 JANUARY2024 特集民俗芸能を後世につなぐ 寄稿1 「民俗芸能の変容と活用をめぐって—継承のためにできること—」独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長 久保田裕道

<https://www.toshi-kaikan.or.jp/shisei/2024/202401.html>

(最終アクセス日 2025年8月30日)

「人口減少社会における中山間地の伝統行事(芸能)維持・継承について」(長野県下伊那地方事務所2014)、平成26年度地方事務所長からの施策提案(長野県ホームページ)

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kikaku/kensei/shichoson/chiho/teian.html>

(最終アクセス日 2025年9月1日)

文化遺産オンライン、「下北の能舞」

<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/160731>

(最終アクセス日 2025年8月26日)

むつ市例規集、「むつ市伝統行事及び民俗芸能の継承発展に関する条例」

https://www.city.mutsu.lg.jp/reiki/reiki_honbun/r291RG00000955.html

(最終アクセス日 2025年8月26日)

Present situation and problems of local performing arts Inheritance in Shimokita area

KUDO Kazuhiko, KIYOKAWA Shigeto

Faculty of Sociology, Aomori University

要 旨

下北地域は、現代において多様な郷土芸能が継承されている一方、令和5年（2023年）に行われている郷土芸能の数は平成6年（1994年）に比べ約6割に減少していることが分かった。その原因を探るため、自治体や郷土芸能実施団体に取り組みと課題についてインタビューを行い、実施の現状と今後について調査した。また、郷土芸能が盛んにおこなわれていた江戸時代と現代の人口を比較すると、現代は江戸時代より約3倍多く、人口減少が郷土芸能衰退の直接の要因ではなく、都市部への人口集積や生活様式の変化が原因であると推定された。

キーワード：下北地域、郷土芸能、インタビュー、人口減少、生活様式